21世紀の学会名はこのままで良いか

Can the Name of "Shomei Gakkai" survive in the 21st Century?

1933年生、明治大学卒。
1953年 NHK 入局。
1989年東芝ライテック
㈱主幹、現在に至る。
著書「おもしろいオ
フィス照明のはなし」。

伊藤 安雄
Yasuo Itow

◀キーワード：照明，照明学会，照明学会誌

1. プロローグ

照明学会にまつわる不思議な話題を二つ紹介しよう。最初は、学会名は『しょうけい』だった可能性を語りたい。

照明学会誌を創刊号から読破しようと決意したものの余りの量にギブアップ。そこで表紙と好みの項目に限り目を通すことにした。

ところがこれも、1934年に再びストップしてしまう。その理由は、表紙の学会誌文字が図1(a)(b)(c)のように変化したことを発見し、以後その理由調査に没頭したからである。まずは、このことを文献上から解説してみたい。

もう一つの不思議な話題は、照明という名称そのものが学会創立直前に技術系の人達の造った言葉であるから、学会以前の明治時代には、辞書に照明という言葉はない。全ての言葉を集めた大言海の中にも照明という語はない。一体照明という言葉は何時できたか、またその意味は何であり、どのような変遷を遂げてきたかを、文献を根拠にした筆者の推論を展開し、最後に21世紀の学会名は照明学会のままで良いのだろうかという疑問を投げたい。

2. 『照明』の読みは『しょうけい』だった？

2.1 初期の学会誌名考

話せば複雑だが、見れば一目瞭然の単純な事実である。まず図1(a)(b)(c)を見て頂きたい。いずれも照明学会誌の表紙の中間を切り抜いたものである。

(a)は『第壹巻・第壹號』大正6年3月18日発行。(b)は『第17巻・第12號』昭和8年12月25日発行。(c)は『第18巻・第1號』昭和9年1月発行の、3冊の学会誌の表紙を並べたものである。

下側の発行元を表す『照明學會』の文字は3号とも同じである。現在の『照明学会』とは字体の違いはあるが一貫して学会の名称は変わっていない。名称は、後半の話題であるから、ここで問題にする学会誌名の比較対照としてご覧頂きたい。

学会誌の誌名の変遷は、『学会75年史』248頁に掲載されている。1946年～1948年の期間だけ雑誌は合併号であり、誌ではなく月報になった。他にも小さな変化はあったが、学会名は不変だったとされているが実は違うのである。

2.2 照明(ショウケイ)から照明へ

写真で明らかのように、創刊号から1933年12月号まで照明の明が違い明になっている。旁は同じだが偏の方が囧に変わっている。囧の字音はケイで光を意味している。

山田勝美著『漢字の語源』によれば、明はベイまたはケイと読むが照明の場合はケイであると記されている。

諸橋轍次等による『廣漢和辭典』は、明は明の本字としているからメイと読めぬことはない。しかし、発行元を表す学会名は創刊号から明で明と対立しているのだから、ショウケイ派とショウメイ派があったと推定される。

『廣漢和辭典』は「甲骨文字から明と明の2体がある。明は日+月で明るい意。明は囧+月で囧はまどの象形。窓を照らす月の意から“あかるい”の意を表すが、後に明に統一された」と解説している。後とは何時か明らかでないが、学会の創立された大正時代までは明よりその本字である明の方が優位にあったと思われる。

その証明として、松下禎二著『文字ノいろいろ』(1920)の一文を紹介したい。

「明ハ月窓ヲ照ラスヲ形容セル字ナリ明ヲ正字トス。後チ其偏ヲ畧シテ目トナセリ、明ハ再畧セラレ明トナリ今日ニ至ル。(中略)前帝陛下ノ御即位ト共ニ改元セラルルニ際シ明治ヲ奏上セシニ、日月相ナラビ治ムルハ恰モ幕府ト協同シテ政事ヲナスヲ暗示シ不吉ナリトノ説出デシモ、席ニ副島種臣伯アリテ之ヲ遮リテ曰ク、明ハ日月相ナラブニアラズ月窓ヲ照スナリ、明ヲ正字トナスト説文ヲ引キテ説明セラレケレバ議遂ニ一決シ御採用トナリタルナリト」とある。

また、1910年刊行の樋口勇著『漢字集話』にも、囧は明かり窓の象形文字であり、明の略字の明は闇に向けて明かり窓から差し込む月光のことであると記されている。そのうえマ行音の漢字は幽暗不明の意味をもつもので、輝く光を意味する漢字はカ行(光輝顕火華等)もしくはサ行(灼炸照昭等)にあると述べ、マ行の明は日と月を合わせた文字ではないと主張しており、前出の副島伯と同じ説を唱えている。

2.3 1934年に学会誌が変わったわけ

それにしても、どんなきっかけで1934年の1月号から現在の照明に変えたのであろうか？ 今となっては知る手掛かりがないので、私論をもってまとめさせて頂く。

大正時代が終り明は明になりつつあった。照明學會雑誌17巻12号は明後日発行の予定で準備が完了し、次号の

(a) 大正6年3月18日発行

(b) 昭和8年12月25日発行

(c) 昭和9年1月発行

図1 照明学会誌の表紙の切り抜き

編集会議が始まっていた。場所は皇居近くの電気倶楽部会議室、時は1933年12月23日である。そこにサイレンの音が鳴り響いた。皇太子（平成天皇）生誕の知らせである。新しい時代の告知でもある。ここで編集長は決断した「次号から照明を照明に変えよう」と…。こうして現在の学会誌のタイトルは誕生したのである。

2.4 明と明の間に存在した明

学会誌のタイトルの話ではないが、書籍の題字に照明が入った最初は、福田 豊 著『電燈及照明』である。学会誌発行以前の1914年10月15日に刊行されている。

本文の文字は照明に統一されているが、題字に限って照明が用いられており、しかも題字は著者の直筆である。

照明学会の創立は2年後で、この本が出た頃の学会は設立準備に入ったばかりで、おそらく学会名は照明がよいかそれとも照明がよいか議論中であったはず、福田は明と明の中間の明を書名に用いて議論から離れたのではなかろうか。

明から明に、明から明に変わる文字の変遷を述べたが、実際に明が用いられた例は少ないようである。

3. 照明という語は誰が造ったか

3.1 照明は大言海にもない言葉

1875年、文部省から辞書編纂の命を受けた大槻文彦が十年の歳月をかけて完成した標準の辞書『言海』の中に「照明」という語はない。照明学会創立16年後の1932年、増補訂正され8万語を採録した『大言海』にも「照明」は登場しない。問題はここから始まる。

3.2 学会初代会長とその弟子の言葉

学会の初代会長山川義太郎（1860～1933）が用語照明について直接的に間接的にヒントを残している。

直接述べたものに学会誌創刊号の「照明学会は2年程前から目論んでおったが…」というヒント、1918年の照明学会第一回講習会の、開会の挨拶「照明と言うのは新しい言葉で餘り廣く知られて居りません。照明學の目的を簡単に言ひますと、有効にして佳良なる採光法でこれは非常に廣い意味を有して居ります」というヒントがある。

間接的なヒントとして、学会誌66巻1号に掲載された弟子大山松次郎（1895～1982）の言葉がある。1976年9月30日に会員のインタビューに答えたものである。

『そもそも「照明」という言葉は山川先生がこしらえたんですよ「しょうみょう」と読むのか「しょうめい」と読むのか「めいしょう」のほうがよいのじゃないか…そんなことを言っていた時代でしたよ。「しょうめい」と読んで「照明学会」と名前を付けようと腹に決めておられた（旧カナ遣いで照はセウ）。実は芝公園に明照会館というのがあって、仏教の方で「明照」という言葉があるのかも知れない』という興味深い話である。

3.3 照明以前の明照とは

「明照」は中国の經典の言葉“み仏の光で明らかに照らす”意味。788年僧最澄は比叡山に不滅の法灯を点し『明らけく後の仏のみ世までも光り伝えよ法のともしび』と詠まれ、今も続いている火の光はその象徴であろう。

また1907年、浄土宗七百年記念にあたり、明治天皇は開祖法然上人に“明照”という称号を贈った。これを記念して作られた建物に大山のいう明照会館という僧房や、明照学舎という大正大学学生寮が今も残っている。

「明照」は仏教用語ばかりではない。1871年刊『西洋見聞録』後編巻二に、「…方今英国ニ於テ瓦斯燈ヲ以テ燭ニ代ヘ、戸々街々ヲ明照スルヲ以テ其便利ナル事述ベガタシ…」と記されており、現在の照明に相当する明照もあったのである。

3.4 やはり初代会長の作品か

照明は山川初代会長の決めた学会名であるが、彼自身1909年頃から照明という言葉を使って講義をしていた。

門弟の福田豊（前出）は、1941年の照明学会副会長としての挨拶で「照明なる言葉は私が東大在学中故山川博士の講義ではじめて知ったのでありまして、その当時のノートブックが未だ保存してありますが、同博士の講義は中判洋罫紙に約3頁位のもので誠に目新しいものでありました。これが明治42年（1909）頃でありました」と述べている。

まとめてみると、照明学会のステータスは創立2年前にできていたが、言葉そのものは6年前から東大の山川教室に芽生えていたし、企業に入った教え子らは、わが国最初の照明課を誕生させ実務を確立したのである。

4. 明治にもあった照明という言葉

とすれば、照明なる言葉は1909年以前には存在しないはずである。それ以前の文献に照明という言葉があれば、その最古のものが言葉の始まりである。

1909年以前の言葉としての照明が存在し、その意味が現在の照明に近いこと、明らかに造語がなされたと判れば、わが照明という言葉の研究は終結する。

これに向け調査研究を始めたのは1970年代である。古本屋を回っては古い辞書を引く“ショウメイ”または“セウメイ”の2種類、国語辞典はもとより和英、和独、和仏、和西、和露……目に付く辞書を引きまくる。照明のアル・ナシと発行日をメモする。英和辞典は lighting および illuminating を引いて訳語を比較したうえ照明のアル・ナシの発行日境界年を調べた。

照明のアルの最初は1917年3月15日発行の上田万年編『大字典』で、照明の意味は「あきらかにてらす」である。照明学会創立日のほぼ百日後の発行であるが、おそらく照明学会など知らずして説明した辞書の言葉であろう。

以後の辞書に照明が載ることは稀で、本来の意味の「人工の光で明るくすること」に近い定義がされるのは、ずっと後のことである。

ポピュラーな携帯辞典にいたっては、1930年代は照明なしで照明弾のみが先に存在した戦争時代であり、照明弾が消えて照明のみが載るようになったのは1950年代になるが、その意味は曖昧なものが多かった。そのせいか日用語は“電気（照明）がついた・消えた”であり、括弧内の照明は日常生活で使う言葉ではなかった。

5. “せうみょう”とも読まれていた事実

また照明の読みも旧仮名遣いの“せうめい”ばかりでなく“せうみょう”とされることもあった。

演芸画報の1922年1月号には、1921年11月26日より帝劇で公演された倉田百三作『出家とその弟子』における遠山静雄の照明の評がある。

「第三幕松の屋の場は漸次陽が落ちていき遂に逆光線となり、人間の影が黒く浮き出るように光線を巧みに操った照明（せうみょう）法に最も感心した」とある。

照明学会の最初は、“しょうめい”とも“しょうみょう”とも言われていたと思われる。

6. 学会以前の照明発見

調査は照明学会以前の電気学会誌・建築学会誌に照明の文字はないか、索引に照明の文字のある図書はないか、古い新聞の片隅に照明の2文字は載っていないかという調査を繰り返した。

そして、ついに『新聞集成明治編年史』第一巻465頁に1872年の照明という2文字を発見したのである。

この事は、『照明学会75年史』「ひとくちメモ14」に故・伊藤孝氏が筆者の調査を紹介している。

「大正3年末、東京電気株式会社に照明課が創設され、内坂素夫氏が初代課長となったところからと思っていたが、NHKの伊藤安雄氏（現在は東芝ライテック(株)研究所研究主幹）の調査によると、明治5年6月の京都新報に掲載された明治天皇の「御入京之記」が最初というご連絡を昭和56年末に新聞のコピーを添えていただいたが、死蔵するには惜しいので、ここに照明関係の記事を摘記してご参考に供することとした」という過分の評価を頂いている。

東京遷都は明治2年（1869年）2月。京都人には残念でたまらぬ出来事であった。それに応じてか3年後には旧都にお立ち寄りされる。喜んだ京都人が大提灯で歓迎した記事を京都新報（現京都新聞）が載せている。この記事中に照明という言葉が発見して四半世紀になる。

今思うと1回しか使われていない照明の文字を良く見つけたものである。

『…ヲ祝シ奉ルノ意ヲ每家ノ檐下ヘハ大提灯ヲ點ジテ萬

歳ヲ祝シ奉ルノ意ヲ表ス、其照明恰モ白晝ノ如シ』というのがその内容である。

この場合の照明の意味は今とは違っていたようである。1903年に三省堂が発行した『和英大辞典』には、shomei, せうめい, 照明, brilliant, bright などとされており illumination や lighting などの訳語は見当たらない。

従って京都新報の前記記事を現代語に訳すと“提灯の輝きが白晝のように明るかった”ということになる。

7. 照明学会誌以前は電気学会誌

電気學會雑誌163号(1902)に八巻弥一氏の「二三種孤光燈の研究」に“水平面に直角なる照輝 illumination”と示しているから、照明は照輝かとなるがそうではない。これと光度との関係を表す計算式も示されており、単位は今とは逆であるがキャンドルフットになっているから照輝は照度であったことが判る。

十年後の電気學會雑誌282号(1813)の青柳英司氏の「清國に於ける電気事業」には“弧光燈と云ふものは一箇所は非常に明るくなりますけれども成るべく照明の均一ならん為めには之を止めてタングステン電燈をセリースにする方が寧ろライティングの目的に叶ふ…”とある。

8. 藤岡市助編の英和辞典

明治時代は、照明ばかりでなく言葉の不安定期であった。“本書中の譯語は主として雅語(昔の洗練された言葉)を持ひたれども必要と信じたる場合には俗語を持ひたる所少なからず…”1902年三省堂発行の英和辞典(コンサイスの前身)の序文の最初である。序文の最後の断りに“本書の編纂に関し……藤岡市助は主として電気學上の語の附譯を擔當し…”とある。国産電球を最初に作ったあの藤岡であり、照明学会発起人である藤岡の訳語に照明は見当たらない。参考までにこの事実を紹介すると、illuminate ①照ラス②燭、燭ナドヲ以テ明ルクス、燈燭ヲ掲ゲテ飾ル③明ラカニス、解明ス。light 名詞省略 ①明リヲ附ク、火ヲ附ク、點火ス、②明ルクスであり、どこにも照明という言葉はない。

手元にあるのは24版で初版から7年間(1903-1910)発行されている。ちょうど照明光源として、ガス灯が良いか電灯が良いか、熾烈な戦いを繰り返していた時代である。にもかかわらず訳語としての照明は出てこない。

藤岡の携帯型英和辞典は、明治時代に照明という語は使われていなかったことの確かな証明資料である。

9. 学術用語は一義一語でなければならないが

照明が学術用語かどうかには議論もあろうが、学会の名称である以上学術用語とするのが妥当であろう。学術用語であれば一義一語は必須である。

ところが照明の訳語は2つ、illuminating と lighting である。両者の意味が少し異なるから、2語が併記されているのであって、英訳の場合どちらにすれば良いかを戸惑うことになるだろう。

10. Illuminating と Lighting はどう違うか

JIS Z 8113 で照明用語 Glossary of Lighting Terms の初版(1976)は根幹用語である照明はない。1988年の改訂版で初めて照明が定義され、参考として、英独仏の訳語の2語が記されている。

背景は国際照明用語で、第3版(1970)では Lighting は「物体とその周辺を見えるように照らすこと」と定義し、Illuminating は「可視放射の対象物への照射」と定義しそれぞれ独立しているが、改定された第4版(1987)では2語が併記され「景色、物体またはその周辺を見えるようにするための光の応用」と定義し、Illuminating の方を優先使用するように勧めている。JIS はこれに準拠して改定したものである。

ウェブスターによれば、動詞 light は“火をとぼす”意味であり、illuminate は“明るくする”意味であるが、名詞にすると2語の相違が曖昧になってくる。

独語の erleuchten と beleuchten の相違もほぼ同じだが名詞化すると両者の境はボケてくる。

東京市政調査会の海外調査報告『街路照明』によれば、点灯(lighting)と照明(illumination)の区別はできないとしながらも、lighting は主として光それ自身の性質に関係し、illumination は反射光の量に関連して用いられる。報告書の英明は Street lighting だから街路点灯になるが、最近の傾向に従い『街路照明』を選んだという。このあたりが現代解釈の始まりであろうか、今筆者は、lighting は物なしの光、illuminating は物こみの光という考え方に自信を持ち、皆さんに押し付けている。

このように lighting と illumination の違いの定義はなかなか難しいが、具体的な例をあげてみれば次第に相違が判ってくるはずである。

11. 使われなくなった Illumination

わが国初の照明用語集は、1917年に東京電気㈱が発行した『名称術語集』である。熟語総数1345でこの内 illumination は19語で、照明、照度、電飾などがあり、lighting は53語で、点灯、採光、照明などである。既に照明は共通語になっている。

これより35年後1953年の『照明のデータブック』の索引欄にある和英対照語は845語、この内246語に照明という語が含まれている。これを lighting と訳した数は46、illumination と訳した数は16、どちらにも訳せぬ語の数188である。

さらに37年後の1990年、照明学会創立75周年記念出版『照明用語事典』の英和索引にある用語は1073語、語尾に照明のつくものの訳は全て Lighting で42もある。

たとえば、アクセント照明やアンビエント照明である。これに限らず照明という言葉は Lighting と訳されている。

ところが Illumination は、照明自体の訳語以外にないのが実態である。これは一体どういうことだろうか？

12. エピローグ

名称誕生にはそれぞれ拠り所があるのだが、照明学会のように80年をこえてくると、その存在はあやふやになってくる。誰もが照明という言葉に疑わぬとき改めて照明とは何かと問うてみた。

地球上で、光を当てられぬ所は深海を残すのみとなった。深海以外なら、どんな所でも好みの配光が得られている。

その代り光に恵まれた人々は“マッチ売りの少女”を感じた、あの光の美しさや、暖かさを知る機会を失ってしまったのではなかろうか。

優れたライティングにより、姿形が美しく見えてくるイルミネーションであっても、人は姿形そのものが綺麗

だからと判断し光の存在など意識することはない。

しかし、ライティングが劣り、姿形が期待どおりの良さに見えないとき、その原因が姿形の悪さにあっても、悪い原因はライティングにあると考えるのが人の心理である。

ゆえに照明という見えるためのライティングに満足してしまうが、それでは余りにも受動的で発展性がない。

新世紀を迎えた今、言葉はまだないが能動的に見せるライティングであり、人の暮らしや行動を支援し産業を助長したうえ地球にやさしい光の応用こそ、わが学会の使命ではなかろうか。

新世紀はまたデジタル時代である。新しい名称が期待される新しい照明は光のタイムシェアリング場であるかもしれない。

これまでの連続エネルギーは贅沢であり、これを切り刻んで効率的効果的に目的どおりの感応をさせる方法が当たり前時代かも知れない。少なくともデジタル映像を相手にするならばその日は遠くない。

そこで21世紀の学会振興に相応しい新名称研究会の設立を提案したい。研究会のメンバーは若者中心であり、学会員以外の方はもとより、国外の方々にも参加して頂きたいと思うが、贅沢なお願いであろうか！